中学生のいじめ認識に関する研究

攻撃的行為に対する認識の分類を通した検討

下田芳幸

(富山大学人間発達科学部)

キーワード: いじめ, 認識, 中学生

A study about recognition of bullying among junior high school students

Yoshiyuki SHIMODA

(University of Toyama)

Key Words: bullying, recognition, junior high school students

目 的

社会的な問題を背景に, 平成 18 年度の調査から文部科学省は, いじめの定義を変更している。いじめ防止対策推進法もこの定義に準じており, 国の施策や学校現場での対応の基本となっている。しかし, その定義に“けんか等を除く”とあるものの, けんかの定義はなされておらず, 除かれる行為について不明な部分がある。また, いじめとされるものに犯罪行為が含まれることもある(かしま, 2008)。したがって, いじめ予防といった心理教育を実施する際には, “いじめ”が包含する範囲や, 犯罪行為との区別についての理解も重要であると推測されるが, そのためには, 生徒がどのような行為をいじめや犯罪と捉えているか, その実態を踏まえることが必要と考えられる。

そこで本研究では, いじめの認知件数が多い中学生を対象に, いじめの可能性のある攻撃的行為に関する認識の調査を行い, 中学生のいじめ認識の特徴を検討することとした。

方 法

調査協力者 中学 1—3 年生 751 名のうち, 記入漏れや回答拒否, 同一回答等を除く 672 名(男子 313 名, 女子 359 名)。

調査内容 先行研究を元に作成された, 同級生への攻撃的行為 35 項目。それぞれについて, ふざけ/いたずら/ケンカ/いじめ/犯罪/分からない, の 5 つのいずれに該当すると思うか, 回答を求めた。

実施時期・手続き 2013 年 10 月に, 学級担任によりクラス単位で一斉に実施・回収された。

結果 と 考察

各項目を回答傾向で分類するため, 男女ごとに非階層クラスター分析(k 平均法)を行った。クラスター(以下 CL)数は階層的クラスター分析の結果を参考に 4 から 7 つを想定し, それぞれについて分析を 5 回ずつ実施した。なお分析には, HAD11.313(清水ら, 2006)を使用した。

男子は, AIC が平均して最も低く, かつ分類結果も安定していた CL 数 6 の結果を採用した。

- ・CL1: 8 割前後が犯罪と回答したもの(“個人情報(写真や住所など)をネットの掲示板に書き込む”, “カツアゲをする(おどしてお金や物を取る)”)の 2 項目)
- ・CL 2: 犯罪との回答が過半数だが, いじめの割合も 2 割前後のもの(“悪口をネット上の掲示板やグループでの会話(チャットなど)に書き込む”, “恥ずかしい写真をネットの掲示板にアップしたり, 写メで回したりする”)の 2 項目)
- ・CL 3: 6 割以上がいじめと回答したもの(“仲間はずれにする”, “机に「死ね」などと落書きをする”)など 16 項目)
- ・CL 4: 半数程度がいじめと回答する一方, 他の回答も 2 割前後あったもの(“悪いうさを流す”, “何人かで押さえた状態で, ズボンを下ろす(スカートをめくる)”)など 9 項目)
- ・CL 5: ふざけといじめが同程度で多いもの(“話し方や行動

のまねをして, 友達を笑わせる”, “変なあだ名をつけ, 友達数人といっしょになって, そのあだ名で呼ぶ”)など 3 項目)

- ・CL 6: ケンカとの回答が多いもの(“1 対 1 の状態で, たたいたりけったりする”, “1 対 1 の状態で, 文句を言う”)など 3 項目)

女子は, AIC が平均して最も低く, かつ分類結果も安定していた CL 数 7 の結果を採用した。

CL1 から 5 までは, 男子と同様の分類であった。

- ・CL 6: ケンカとの回答が多いもの(“1 対 1 の状態で, たたいたりけったりする”, “1 対 1 の状態で, 文句を言う”)の 2 項目)

- ・CL 7: ケンカが半数程度で, いじめとの回答も 4 分の 1 程度見られたもの(“ムカついたなどの理由で, ムカついている本人だけが無視する”)の 1 項目)

まず, 男女で CL の分類結果は概ね共通していることから, いじめの可能性のある攻撃的行為の認識について, 中学生における性差はさほど大きくない可能性が考えられる。

ケンカとの回答が多かった CL6 の共通点は 1 対 1 であり, この条件であれば中学生はケンカと認識する傾向にあると推測される。しかしいじめの特徴として, 立場の不均衡ないし加害の一方方向性が指摘されている(例えば小林ら, 2013)。したがって, 1 対 1 であっても一方的なものは, ケンカでなくいじめである, といった理解を促すことが必要であろう。

また, CL4 や 5 においては, 特にふざけと捉える生徒が少なからず見られた。しかし, ふざけの延長でいじめが生じる場合があるほか, 文部科学省のいじめの定義では被害者の受け止め方が重視されていることから, 行為の内容だけでなく受け手の視点に立つための働きかけが有用と思われる。

インターネットに関係するものは犯罪との認識が多かったが, CL2 ではいじめと理解する生徒も少なくなかった。また, 特に CL2, 3, 4 の中には, 文部科学省の通知で犯罪行為とされているものも含まれる。攻撃的行為がエスカレートするのを予防するためにも, こういった攻撃的行為の犯罪性に関する知識提供も必要であろう。

以上から, いじめ予防の心理的アプローチに際して, 行為の認識の多様性に留意しつつ, 犯罪行為の可能性も含め, 被害者の視点に立った認識の育成が必要であると考えられる。

引用文献

- かしまよりこ (2008). スクールカウンセラーにできること 本間友巳(編著) いじめ臨床 ナカニシヤ出版 pp. 97-114.
- 小林英二・三輪壽二 (2013). いじめ研究の動向 茨城大学教育実践研究, **32**, 163-174.
- 清水裕士・村山 綾・大坊郁夫 (2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析(1) 電子情報通信学会技術研究報告, **106**(146), 1-6.